

大学における持続可能な生き方を考える日本語教育の試み —中国における「聴解」の授業の事例から—

基礎教育 小田珠生



お茶の水女子大学文教育学部言語文化学科日本語・日本文学コース卒業。同大学院人間文化研究科国際日本学専攻修了。博士(人文科学)。グローバル化が進む現代社会で生きていくための「ことば」の教育のあり方を模索することを目的とし、言語生態学を理論的支柱とする持続可能性日本語教育の可能性を、理論と実践を往還しながら追求している。

中国は、近年の目覚ましい経済発展の一方で、格差、環境破壊等の様々な課題を抱えている国である。新型コロナウイルスの感染拡大等、情勢が不安定なグローバル化社会において、今後の中国の行く末を世界中が固唾を呑んで注目していると言っても過言ではない。岡崎(2009)は、グローバル化の下で持続的な生き方を考える「持続可能性教育を内容とする言語教育」を提案しているが、中国において「持続可能性日本語教育」の具体的な方法を探ることは意義があると考えられる。

本研究は、北京のある大学において、日本語専攻の3年生(19人)を対象とした「持続可能性日本語教育」を志向する聴解(日语新闻视听)の授業を行い、その可能性を探ったものである。授業の期間はコロナ禍以前の2011年9月～2012年1月で、授業の内容は、次の通りである。①中国の原子力発電所や水資源の現状など、授業で扱うテーマについて事前に調べてくる。②2～3人のグループに分かれて調べてきたことを共有する。③テーマと関連する映像を視聴し、内容把握やディクテーションを行う。④ロールレタリング(岡崎2009)などを行い、グローバル化による競争的発展社会の下、厳しい生活を余儀なくされている登場人物の心情や「もし自分だったらどうするか」ということを考えたり、自分と彼らとの関連を考えたりする。⑤2～3人のグループに分かれて、「以前と考え方が変わったか」「これからどのように生きていくか」などについて話し合う。

分析は、学生によって書かれたものや、グループディスカッションの音声データを文字起こししたものを対象とし、質的に行った。その結果、「北京という中国の経済発展の中心にいる自分たちの生活が、農村の人々の犠牲の上に成り立っていることを初めて知った」「これからは節水したい」と述べるなど、持続可能な社会に対する関心の萌芽が見られた。